

文=五月女善重
(五月女総合プロダクト)

2008年の師走、朝から煩雜で昼食も忘れていた僕は、夕方になつて急に空腹をおぼえました。半端な時間帯ですから、どこもランチなど終わっています。

「そうだ、あの店に行つてみよう」

僕はある喫茶店を思い出し、車を走らせました。

昭和51年、僕の父親が副業として小さなパチンコ店を開いたのと同時期に、店铺の向かい側にその喫茶店はオーブンし

「アルマードなんか着て、立派になつて」いくつになつても僕を子供扱いする、上から目線の物言いが心地良いのです。

本当に久しぶり、と笑いながら、マスターは言いました。

「幸せになると、みんな来なくなっちゃうんだよね」

胸の奥が、コツッと突つかれました。思い返すと僕も、疲れたり悩んだりした時、ここに来たように思います。

父親のあとを継いで訳も分からずホールに立ち、お客様から毎日クレームを受けて「こんな業界は嫌だ、別の世界に行きたい」と思い詰めていたところ。業界を変えようと、むやみなトップダウンで突っ走っていたころ。仕事が原因で好きな女性と別れざるを得なかつたとき…。

二代目の重責に押し潰されそうになるたびに、責任のなかつた子供時代に帰りたい気持ちになつたのでしょうか。

過ぎた日々をほんやり思う僕に、その声は意外な角度から飛んで来ました。

「年内で閉めるんだ」

この店はマスター

のお父様の意向で

続けていたそうです

が、最近お父様が天

寿をまつとうされた

ので、閉店を決めた

のだと。クローズ

したあとはどこか遠い所でのんびり暮らしたい、と楽しそうに未来を語ります。「え…」

当たり前のようにあるものが無くなる事実に、僕は小さく混乱しました。

しかし動搖を悟られぬように晴れやかな顔を作り、門出を祝う言葉を述べることで、僕は男として、そして経営者としてのプライドを、どうにか保つことができたのです。

別れ際、僕はマスターに名刺を渡しました。30年以上の付き合いの中で、初めての出来事です。

もう会えないし連絡も来ないでしよう。それが現実なのですが、思い出を繋ぎとめる唯一の手段として、名刺を差し出すしか、すべがなかつたのです。

Time goes by…時は過ぎゆく。

帰り道、固いハンドルを握り締めながら、こみ上げる涙を抑えることができませんでした。そこには甘つたれな二代目の、原点の僕が居たのです。

[A]



さおとめ・よししき

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の喫茶店を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在9店舗を経営。1965年生まれ。

遠のいていたのですが、緑色の木枠のドアノコ店はもうありませんから自然と足が遠のいていたのですが、緑色の木枠のドアノコ店は昔の姿のまま、そこにありました。

「ああ、よつくん。いらっしゃい」

マスターにとつて僕はずつと小学生の「よつくん」のままのようです。変わらぬ笑顔と薪ストーブの煙たい匂いに、ホッとしながら上着を脱ぎました。